

序

世のなかには、輸液に関する本がいくつも存在しています。このことから、輸液が日常診療でほぼ毎日出会う一般的な医療行為であること、そして輸液をもっと知りたいと考えている医療者が非常に多くいることが容易に想像できます。一方で、人間の体はよくできているもので、多くの患者さんでは良くも悪くも適当な輸液をしても大きくは外さないので現実です。結局のところ、輸液は分かったようで分からない、なんとなくオーダーできるようになったけどいまいち自信がもてない、そんな感覚をもつのではないかでどうか。少なくとも、私自身がそんなレジデントのひとりでした。正直に言うと、今でも自信満々で輸液ができるわけではありませんし、恥ずかしながらうまくいかないことがあります。それでも、分からぬことばかりで不安だったレジデント時代から成長した部分があります。それは、輸液についての基礎知識が増えたこと、自分で考えた輸液を実践してはうまくいかない部分を修正することをくり返して、輸液の戦略の組立てと修正ができるようになったことだと思います。

本特集はその経験を踏まえて、輸液のはじめ方だけでなく、その後どのようにモニタリングしていくのか、どのように輸液を終わらせるのかまで含めて、はじめから終わりまで道筋を立てながら輸液の戦略を組立てられるようになることを目標にしています。そのために必要な基礎知識から、実際の症例に合わせた輸液例とその経過まで、できるだけ具体的に、かつ幅広くカバーすることをめざしました。具体的な構成としては、まず、第1章は輸液の基礎知識を学ぶことにフォーカスしました。考えるための道具がなければ、思考を組立てていくことは難しいですから、まずはここで知識を整理しましょう。そして、第2章は、症例を通して筆者の先生方がどのように輸液戦略を組立てているのか、その思考回路を自分にインストールするようなイメージで読んでみてください。第3章は、実際に輸液を投与するときに疑問に思うようなことをとり上げているので、ふとしたときに読み物的に楽しんでいただけると思います。

この特集を読んだ後は、自分が担当している症例の輸液戦略を実際に考えてみましょう。そして、自分で考えた輸液戦略を、実際の患者さんで実践してみましょう。知識は、頭のなかに秘めているだけでは宝のもち腐れになってしまいます。本を読んで、なんとなくできるような気持ちになって終わってしまうのは、非常にもったいないことです。実践の際には上級医に相談することを忘れずに、「なんとなく」ではなく、「〇〇という理由でこの輸液をしようと思います。」とプレゼンできるレジデント、素晴らしいです！もし、自分の意見が通らなかったとしても、うまくいかなかったとしても、必要以上に落胆しなくても大丈夫です。ここまでできていれば、どうして上級医が違うプランにしたのか、どうしてうまくいかなかったのか、考えるための道具を持っているは

すです。悲しかったこと、悔しかったこと、うまくいかなかったことを糧にして、ぜひご自身の道具を磨いていってください。

輸液は極めはじめると非常に奥深すぎる領域であり、本特集で輸液のすべてを網羅することは不可能です。もっと勉強したい皆さんのために、世のなかには素晴らしい輸液の本や論文がたくさんあります。本特集で学んだ皆さんなら、何が分からいかわかるようになってきた、はずです。これからもぜひ学びを深めていってください。そして、上級医になった際には、かつての私のような迷えるレジデントを救ってあげてください。私自身も多くの素晴らしい上級医に恵まれて今があります。今回このような形でレジデントの皆さんにかかわることができたことで、これまで私を導いてくださった先生方に、少しでも恩返しができたのではないかと感じています。

最後に、今回の特集にあたり、臨床経験に則した知識を簡潔にまとめつつ、惜しみなく共有してくださった筆者の先生方に、改めて感謝申し上げます。私自身もレジデントだった頃を思い出しながら勉強させていただきました。読者の皆様にとって、何か1つでも今日からの輸液診療を支える礎になるようなメッセージがお伝えできていれば本望です。また、よろしければ今回の特集をお読みになって感じたご感想・ご意見などをお寄せいただけるととても嬉しいです。

2024年2月

Brigham and Women's Hospital Transplant Research Center/
聖マリアンナ医科大学 腎臓・高血圧内科
寺下真帆